

飛び立つ妖精を、僕は友達と呼んだんだ

テフロン

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

深海棲艦と戦う艦娘たち。その戦いの中で日の目を浴びない者たちがいる。それが妖精さんたちの存在である。これは特に妖精の中でも艦載機に乗る者に焦点を合わせた物語である。

艦載機熟練度とは、それを操縦する妖精さんの熟練度。だったら、落とされてボーキサイトの消費だけ表示されるあの一瞬に妖精さんたちはどれだけ命を削っているのか。そう考えたら書いてみたくなりました。

これは妖精と話ができる少年と妖精、艦娘と時々提督と、深海棲艦のお話。

メインでやっている小説のサブ的な形でやっているの、更新は不定期です。気が向いたら更新します。もともと今書いている小説の派生で書くつもりだった小説ですので、主人公の設定は同じ設定を想定しています。

## 目次

第1話	新しい部署は、妖精管理部と言った	1
第2話	聞こえない声を、無色だと言った。	7
第3話	ぶつけ合う景色を、色づいていると言った。	17
第4話	同色の者を、異色と言った。	27

## 第1話 新しい部署は、妖精管理部と言った

なぜ僕はここにいるのだろうか。

こうして呟くと凄く哲学的な問いに感じてしまふけれど、この場合の疑問はもつと単純なものだ。

どうして鎮守府と呼ばれる軍港で働いているのか。

どうして軍港なんかにいるのか。

どうしてここで働くことになってしまったのか。

これらに対しての疑問である。

働くことになった理由として最初に槍玉に挙がるのが、纏わりついてきた妖精と話してしまったことだろう。たまたま近くにいたときに、妖精が話しかけてきたから思わずお喋りしてしまったことがあだとなってしまった。

行く当てもなかった僕は、そのまま流れるようにしてこの役職についてしまっている。

「妖精管理部」

思わず二度見してしまいそうな名前である。

管理部なんて言うけれども、僕一人の部署である。僕一人しかない。

やることは妖精の体調管理が主で、話し相手になっただけだ。

それ以外には特にやっている認識はない。しいて言えば、妖精が怪我をした際に手当てをするぐらいだろうか。

妖精の話し相手なんてしたことがなかったけど、話をすればするほど妖精と話をしている感覚がどんどんなくなっていくのを感じていた。

「妖精と話している感覚がないって言っても、そもそもこれが妖精っていう感じが全くしないんだよね」

ここの妖精は随分と変わっている。  
羽も何もついていなくて飛べない。

その代わり、みんながみんな人語を理解できる。

僕が担当しているのはそのほとんどが艦載機に乗る妖精である。理性があつて、艦載機と呼ばれる飛行機に乗ることで空を飛ぶことができる妖精である。だから全てが全て、話ができるのかといわれると不明だけど、僕の知る限りにおいては人の話している言葉を理解しているように思う。

そして、その中でも偶に会話ができる妖精がいる。

「おかえりなさい。お疲れ様です。怪我はありませんか？」

「ただいま帰りました！ 今日誰も死にませんでした！」

部隊の隊長を務めている妖精——前田君が元気よく返事を返してくれた。

隊長という立場にいる妖精はみな会話をすることが出来る者で固められている。隊長を選出しているのは妖精自身で、どうにも力の序列があるみたいだった。

「それはよかった！ 今日打ち上げをしよう。あ、もちろん明日も出撃しなきゃいけない人は飲んじゃだめですよ？」

「それはあんまりではないでしょうか。一航戦である正規空母の赤城さんは、うちの鎮守府のエースです。明日も出撃命令があるかと思いません」

「じゃあまた今度だね。生きて帰ってくるように！」

「善処します!!」

迎えたのは、総勢——82名の艦載機に乗っている妖精たちである。

妖精はそれぞれに各々の表情を浮かべながらぞろぞろと妖精用の建屋に入っていく。

彼らの生態系はよく分かっていない。何を食べているのかとか。呼吸しているのかとか。何も知らない。

だけど、笑みを浮かべて元氣よく挨拶してくれるその様子はまるで人間のようで、本当に嬉しそうだった。それを見た僕も嬉しくなった。

ただ、通り過ぎていく妖精の中で一際目を引く者がいた。うつむいて元氣がなさそうにしている。いつもそういう雰囲気を纏っている妖精だった。

「足立君！ ちょっといいかな？」

「は、はい……なんでありませんようか？」

「そんなに怯えなくてもいいのに。僕はあくまでも仮職員の立場だし、友達と欲ってくれていいんだよ？」

「そ、そんなことできません……」

足立君は、1部隊の小隊長をしているが自信が無さ気なのが勿体ないところだ。場数もこなしていて経験も豊富、特に危機管理能力が高いのが特徴で操縦も上手いって聞くんだけれど——どうしても一皮むけないと言われている。

使う側には分かるみたいだね、そういうの。

僕は戦場に出たことがないから分からないけど、使っている身からしたら同じように命を懸けているわけだし、いろいろ理解できるのかな。

「やっぱり怖いのか？」

「……怖いであります」

「死ぬのがつてこと？」

「いえ、仲間が墜ちるのが……」

こうした話を聞くことが僕の役目であり仕事である。

妖精は一人ひとり悩みを抱えている。戦闘凶みたいなのもいるに

はいるが、臆病で心優しい妖精が多いということが最近になって分かってきた。

艦娘だけじゃなくて妖精だって戦っているんだよね。

どこから生まれているのか。何から生まれているのか。何も分かんなくても——生きている生き物なんだよね。

理性があるから恐怖がある。本能があるから生きたいと思う。誰も死にたいなんて思っていない。

僕がやるべきことは、そういう理性からくる悩みや本能からくる不安を聞くことだけだった。

「いつもお疲れ様です。あの子たちの様子はどうでしょう？」

「いつもと変わらないですかね。ただ、小谷野が体調崩して休んでいるぐらいでしょうか。妖精にも病気がつてあるんですね。ここに来て初めて知りました」

「そうですね、それは心配ですね。私たち艦娘には妖精の声は聞こえませんから、非常に助かっています。あの子たちをよろしく願いますね」

ねぎらいの言葉をかけてくれたのは、正規空母の赤城さんである。

この鎮守府は割と最近できたところらしくて、まだまだ艦娘が足りない場所らしい。らしいなんて不確定な情報になっているのは、僕にその知識がないからだ。

多いのか少ないのかなんて議論は、他の鎮守府の事情を知っている者だけができる議論である。多いのか少ないのかに限らず、どんな人がいてどんな場所なのかもよく分かっている。何と戦って何を守ろうとしているのかもそれほど理解できていない。妖精の話も聞いても何も理解できなかった時は、これじゃ話ができていないのと同じだと思ったぐらいだ。艦娘も深海棲艦も初めて聞く単語だったし、習ったことないし、ここに来たときは覚えるので必死だった。

「もしよかったらお食事でも一緒にどうでしょうか？ 間宮さんの

ところで昼食を食べませんか？」

まさかのお食事のお誘いが来た。

僕は、基本的に妖精と一緒にご飯を食べているからこうして艦娘の人たちから誘われるのは初めてである。そもそも、余り艦娘の人たちと出会う機会がないのだ。ここには空母系の方しか来ないし、駆逐艦や軽巡洋艦、重巡洋艦、戦艦の人たちからしたら訪れる意味があんまりないというか、別に訪れたくない場所と思われるというか——  
—有体に言えば避けられている場所だ。

なんでも、妖精と話しているのが気持ち悪いということらしい。艦娘の人たちには妖精の声が聞こえないから僕と妖精が話している光景というのは酷く気持ちが悪いものなのだろう。あるいは、突然やってきた僕を受け入れられないということもあるだろう。

なんにせよ——避けられているという事実は確かにあった。

「喜んでいきますよ。ただ、僕は薄給なのでおごるのは無理ですよ。」

「仮職員の方は無料で利用できないのですか？」

「無料ではないですね」

「あら？。だったら提督と少しだけお話しておきましょうか？。貴方を重用している提督ならば、きつと飲んでくれるはずですよ」

「そうして頂けると助かります。ですが、あそこは基本艦娘の皆さんが利用される場所なので、僕が行くと視線を集めると思いますよ？」

「そうして避けていたらいつまで経っても現状は変わりません。ただでさえ避けられているのですから早く打ち解けてください」

逃げているわけではないのだけど、そう思われてしまっているようだ。

間宮さんのところには、ほとんど行ったことがない。ほとんどというか一度も行ったことがなかった。そうなる——故意に避けていたと思われるも仕方ないと思った。



「行きますよ。拒否権はあげません」

「赤城さん、結構強引なんですね」

「強引ですって……そうなのでしょうか？」

「疑問符を浮かべながら力強く手を引く赤城さんはどう考えても強引ですよ」

僕は、力強く手を引かれて妖精の建屋を後にする。

後ろには、いつも送り出していた妖精が敬礼をしながら僕を見送っていた。

「あいつら……」

「健闘を祈ります！」

僕は戦いに行くわけじゃなくてご飯を食べに行くんだよ。

そんな心の中の突っ込みが妖精に聞こえるわけもなく、妖精達は姿が見えている間はずっと敬礼したままだった。

## 第2話 聞こえない声を、無色だと言った。

「初めまして、お会いするのは初めてですよね？」

「はい、初めてですよ。僕はまだここには来たことがないので」

「間宮さん、こちらは妖精管理部の……」

「ああ、あの新しくできた部署ですか。艦娘の間で話題になっていましたよ。謎の部署ができたって」

「部署といっても僕だけしかいないんですけどね。ちなみに、どんなふうに話されているのでしょうか？」

「それは……」

「言い難いのなら別に言わなくてもいいですよ。何となく分かります。そこらへんは龍驤りゅうじょうさんから聞いています。あまりよく思われていないみたいですわね」

僕の部署が艦娘たちからどんなふうに使われているかは知っている。  
どうしてそんなふうに使われているのかも何となく理解できる。

言うなれば——よく分からないもの、余計なもの、邪魔なものだ  
という認識だ。

赤城さんの鋭い視線が向けられる。

「間宮さんを困らせないでください。ご飯に影響が出たらどうするのですか？」

「それはすみません。ご飯に影響が出るのかどうかはおいという、確かに間宮さんに迷惑をかけるのは筋違いでした。それでは、昼食のオーダーいいですか？」

「はい」

「いつものを」

「赤城さんはいつものですね、承りました」

いつものとは、何なのだろうか。赤城さんはいつもここを利用して

いるからそれで通るのか。

僕は、何を頼もうか。初めて一緒にご飯を食べるのに食べる料理が違うというのは、どうにも協調性がないと思われてしまうかもしれない。料理の味についての話ができない可能性もあるから同じものを選んだ方がいいだろう。

「いつもの？ それじゃあ私も、そのいつものというのを」

「え、本気ですか？ いつものでいいのですか？」

「そんな反応されると怖くなるのですが……食べ物なんですよね？」

「ええ、一応食べ物ですけど……」

「だったらそれでお願いします」

ボーキサイトとか鉄鋼とか持っていてこれだと食べられないけど、一応食べ物だと言っていることから、さすがに人間の食べられないものが運ばれてくるということもないだろう。

とてつもなく辛いものが出てきたり？

だとしたら辛い物に耐性のある僕としては、特に問題視することもない。

「間宮さんの作った料理はとてもおいしいのですよ。私は、毎日ここで食べています」

「赤城さんがそこまで言うことは、期待大ですね。楽しみです」

嬉しそうに、楽しそうにいう赤城さんの表情を見ると、こつちまで嬉しくなりそうだった。赤城さんと一緒に食事をとった経験がないから知らないけれど、そもそも食べることが好きなのかもしれない。それでも、ここでいつも食べているということから間宮さんの作る料理のクオリティの高さが窺い知ることができた。

期待は大きい。だけど、どうしても周りの閑散とした席が目立っている。

そこまでおいしいというからには艦娘の人たちの間でも人気だろ

うけど、何でこんなに少ないのだろうか。

「それにしても今の時間帯は人がいないのですね」

「少しだけ早く来ましたから。それに、護衛艦をしてくれた駆逐艦と軽巡洋艦の子達は中破してしまった子たちが多かったので現在入渠中です。後は遠征に出かけている子達が数名います」

「そうだったのですか。でも、こここの鎮守府にいる艦娘はそれだけではないんですね？」

「この鎮守府には現在32名の艦娘がいます。そのほとんどが駆逐艦です。あの子たちは仲がいいのできつと入渠中の子達と一緒に来るともりなのではないでしょうか？」

軽巡は川内型の3隻と天龍型の2隻。

重巡が妙高型の足柄と羽黒、そして利根型の利根の3隻。

水上機母艦は千歳の1隻。

軽空母の龍驤、祥鳳、鳳翔の3隻。

正規空母が私。

戦艦が山城の1隻。

残り18名は駆逐艦です。睦月、如月、菊月、長月、吹雪、叢雲、綾波、朧、曙、潮、暁、響、時雨、夕立、朝潮、霰、不知火、黒潮。

「随分といっぱいいるんですね」

「この鎮守府は少ない方です。多いところでは100を超えているところもあります」

「そんなにいっぱいいるんですか——覚えるのが大変そうですね」  
「気にするのはそこなのでしょうか？」

いや、そこでしょう。大は小を兼ねるなんていう言葉があるけど——  
——上手く扱えなければ宝の持ち腐れだ。

多くなればなるほど人間関係は複雑になる。人数が増えれば増えるほど、一人あたりにかけている時間が少なくなる。

代わりができる存在が多くなればなるほど——人を雑に使い始める。

大きくなると全体が見えなくなる。

地球の裏側で何が起こっているのか分からないのと同じだ。

そして、近場で言えば——キッチンで起きていた事実を知らないのと同じである。

「お持ちしました」

「えっ……冗談でしょう?」

「冗談なんかじゃありません。私の“いつもの”とはこれのことです」

これ、見上げるほどあるぞ……目の前の大きなカレーの山に絶句しそうになる。

とてもじゃないが人一人が食べる量ではない。10人分は確実にあるだろう。いや、それ以上かもしれない。

「もちろん残しませんよね?」

「残したら食べてくれますか?」

「……いいでしょう」

「それなら安心です。ありがとうございます、赤城さん」

とても食べられる気はしないが、千里の道も一歩よりだ。食べないと減らない。

一口目をすくって口に入れる。甘い方向に舵を取っているカレーは、口の中で溶け込んで消えた。

うん、おいしいね。個人的にはもう少し辛いカレーの方がいいけど——これもこれでおいしい。

そういつてバクバク食べていると——すぐに僕のお腹は限界を迎えた。

あ、これは駄目みたいです。お腹がいっぱいになってきた。

目の前の皿は、まだ四分の一も減っていない。赤城さんの皿はすでに半分を超えて残り数分持つか持たないかというところまで来ている。

一体、どこに入っているんだ。質量がどこに保存されているのかさっぱりだ。お腹が苦しくなるのと並行するように、悪態をつくような気持ち がせりあがってくる。これが上がってきたら、次は吐き気の番だ。

僕にとっての終わりはもうすぐそこまで来ていた。

「く、苦しい……」

「思ったより小食なのですね」

「見たままですよ。というか小食じゃないです。十分食べています」

「そうはみえません……だって、全然減っていないですよ？」

そう思うのは自分を基準にしているからだよ、赤城さん。

にしても本当にやばいな。突っ込んでいる場合じゃない。食べ過ぎて気持ち悪くなるところまで来てしまっている。

うんざりしそうになる気持ちを表現するように体をひねって体勢を立て直す。何とか状況を打開しないと。

「あ、前田君……」

その際、出入り口付近で妖精の前田君が見ているのが確認できた。僕を見送った後に気になって様子を見に来たのかもしれない。これは好都合だ。もしかして手伝ってもらえるんじゃないだろうか。

まさか、前田君だけが来ているというわけじゃないだろう。いくら妖精といえど、いくら体が小さいといえど、総勢82名の妖精、みんな食べればこんなもの一瞬になくなるはずだ。

「前田君……手伝ってくれないか？」

「いやです！ 頑張ってください！」

「なんで!？」

「妖精はカレーを食べません。そんなことも分かっていないとは、妖精管理部の職員として失格ですよ?」

「いや、いつも食べているじゃん! おいしそうに食ってるじゃん!」  
「それはたまたまです! その時はきつと食べたい気分だったので。普段は食べないものを食べたい気持ちだったのです」

「だったら食べれるでしょ!？」

「今日は残念ながらそういう気分ではないようです。私の中の神様が食べない方がいいと言っています」

マジでこいついい性格しているな。

にこにこしている前田君に腹が立つてくる。

しょうがない——僕が食べるしかないか。

気が滅入るような存在感を未だに放っている山盛りのカレーに一振りのスプーンを突き刺す。そして、口に入れようとカレーを運ぶ。

うん、味が分からなくなってきたな。

もう赤城さんに頼んだ方がいいんじゃないだろうか。

本気で赤城さんに食べてもらおう方向で思考の舵を切ろうとしたところで、それを遮るように横から声が飛んできた。

「うわあ——これはあかんやつやな。えらいこっちゃ。きみい、赤城にはめられたん?」

「人聞きの悪いこと言わないでください。私が頼んだわけではありません」

「何言うてんねん! こんなもん頼むやつが他におるかいい!」

突っ込みを入れた存在は、僕の顔見知りである。赤城さんと比べると身長がかなり低く、髪型はツインテールで勝気な性格が全面から滲み出ている。ついで喋りは訛りが強くて、僕は聞いたことがないから知らないけど関西弁っぽい印象を受ける喋り方をしている。

これらの特徴を持つ人物、それが——軽空母である龍驤さんであ

る。

空母としての両者の大きな異なる点は、艦載機の発着艦の違いだ。どういう仕組みでそうなっているのかは分からないが、見させてもらった限りにおいては全然違っていた。

赤城さんは弓道スタイルであり、弓を放つことで艦載機を飛ばしている。

龍驤さんは式神のような人をもじったような紙切れを飛ばすことで艦載機を飛ばしている。

どちらの方法にせよオカルト的な要素を感じるが、見た目での大きな違いはそういうところだろう。艦載機を乗せられる数が違うとかは些細な違いだ。

そして、ここで最も大事なことは、目の前に立ちはだかるカレーの山を消費するための手段がもう一つ増えたことである。

「龍驤さん、いいところに！一緒に食べてもらえませんか？」

「キミがどうしてもって言うのなら、食べてやらんこともないけど……」

「お願いします！龍驤さんの力が必要なんです！」

「そうかそうか！赤城は手伝ってくれそうにあらへんし、ウチがキミを助けたる！あ、お金は出さへんよ？」

「そりや僕が出しますよ」

「おいきた！任せときー！ウチに任せてもらえれば、正規空母の1隻や2隻分の食料なんてお茶の子さいさいやで！」

頼もしいことを言って僕の隣に座って食べ出す龍驤さん。

こうして横に座られると体の小ささが余計に顕著になる。身長でとやかく言うつもりはないけど、妖精を見ている僕が言うことじやないと思うけど、こういう子が世界の海を守るために戦っているって本当にどうなっているのだろうと疑問を感じてしまう。

だけど、それもそういう仕組みになっていると言われれば納得せざるを負えない。代替がないのだから——こうするしかないという



のが現状なのだから。

「おおう、やっぱ何度食っても間宮が作ったカレーはおいしいやんなあ〜！　いくらでもいけるでー！」

龍驤さんは、勢いよくバクバクと僕が途中まで食べたカレーを食べ歩いていく。おいしそうに食べているのを見るとこっちまで顔がほころびそうになった。

カレーの山の威圧感が心なしか小さくなっている気がする。協力者がいるだけでここまで気持ちが変わるものだろうか。

僕はもうお腹いっぱいのにぎりぎりのところだったからほとんど食べられないけど、この調子なら全然大丈夫なはず。

なんていうのは——ただの幻想だった。

「あかん、舐めとったわ……」

「え、龍驤さん、あれだけ大見得切っておいてそれはないんじゃないですか？」

「ああー、なんや、その……ウチの頼れる姿っちゅーのを見せたかったっていうか。あんなふうにキミから頼まれたら何とかしたくなるやんか。いつも世話になっているわけやし……」

カレーを僕の前においてぐったりした様子で机に突っ伏す龍驤さん。

「うえええ……」

「出しちやいけないですよ」

「分かつとるよ。分かつとるけど、これ以上は無理や。あかんやつや。今、人生で一番のピンチかもわからん……キミの手で背中さすってくれへん？」

「そんなことしたら吐いてしまいますよ。口からゲロゲロと出てしまいますよ」

「ちよつちなら大丈夫やって」

なんだその麻薬やタバコみたいな感覚。  
絶対大丈夫じゃない。

やばいと思つたらすぐに止めよう。

出したら、間宮さんにも赤城さんにも悪い。

龍驤さんの背中をさすつた自分の責任も重い。

「はいはい、これでどうですか」

「ああーええね。キミの手が温かくてポカポカするわー」

「お腹の調子はどうですか？ 良くなりそうですか？」

「背中さすつているだけやのにお腹の調子が良くなるかい。キミがもうちよい続けてくれたら何か起こるかもしれないが、どうなるかは神のみぞ知るつちゅーやつやな」

「だったら止めます」

「ああ！ なんでなん!? これでも頑張つた方やろ！ 褒めてーな  
！」

これはもう無理だな。

目の前を見てみれば、赤城さんのカレーはすでに無くなっていた。  
よし、赤城さんに頼もう。そうしよう。

「駆逐艦のみなさんが戻ってきましたね」

「……………」

——間が悪い。そうとしか言いようがなかった。

「あー疲れたわ！ あの司令官！ もう少しどしっと構えたらどうなのかしら!? ほんとに情けないっただらありやしないわ！」

「叢雲ちゃん、司令官にそんなこと言つちやいけないよ」

「吹雪、あんたはあいつを甘やかせずぎー！」

「提督はきつと僕たちを心配しているんだよ。だから不安なんじゃないかな？」

「時雨まであいつをかばうの!? そんなんだから空母のみんながあの妖精管理部の男のところに行くのよ! 私たち艦娘は司令官の命令だけを受けるのよ。他のどこの誰とも知らないやつ……」

そこまで話したところでこちらの存在を視認する艦娘たち。

同時に強気で話していた一人が口をぱくぱくさせながら固まる。

赤城さんが静かに佇み。

龍驤さんは机に倒れている。

そして、残り三人分となったカレーが置き去りにされている。

場は——混沌としていた。

### 第3話 ぶつけ合う景色を、色づいていると言った。

ニコニコした顔で僕の隣でカレーを食べていた龍驤さんはもうここにはいない。

食べ過ぎて机に突っ伏していた龍驤さんはもうここにはいない。

龍驤さんがいた隣に目をやってみる。僕の隣には大きな空間が空いている。

そして、通路となつている空間では総勢4名の艦娘が重い空気を共有していた。

若干目が怖くなった龍驤さんの視線が叢雲さんに注がれている。

目の前にある3人分のカレーを残して、僕と赤城さんは視線を交わすとその息を吐いた。

喧嘩が始まる。空気がそう言っている。

ピリピリとした雰囲気が発言するように、未来の行く末を明示していた。

「今、なんて言った？ もう一度言うてみい？」

「ふ、ふんっ！ 何を言われようとも私は謝らないわ！ 私は何も間違ったことは言っていないもの！」

「間違っている、間違っていないちゅー話やない！」

「だったら何なのよ!？」

「叢雲、あんたが侮辱したのはこの鎮守府で働いている相手だつてことや！ どころも知らないやつじゃない！ 仲間に向ける言葉じゃないってゆーてんのや！ 深海棲艦との戦いで頭のネジでも飛んだか？ 自分が今なんて言ったか思い返してみ？ それは明らかかな侮辱やで？」

「頭のネジが飛んでいるのはあんたの方でしょ!？ こんな男のところに入り浸っちゃって——正直言つて気持ち悪いのよ！」

「なんやて!？」

龍驤さんの顔が怒りの色に染まっている。普段なら見せないよう

な顔になっている——眉間にしわを寄せてがんを飛ばしている。  
相対する叢雲さんの表情も同じような顔になっている。気が強い二人はお互いに退く様子を見せない。怒って、イライラして、自分の我を通そうとしている。

「ちよつと叢雲ちゃん、それ以上は……」

「吹雪、止めないで！今はこの分からず屋と話しているのよ！」

「分からず屋はどつちや!!」

（この話はそんなに譲れないことなのかな？ 指揮系統に関わるのは分かるけど……）

内容は僕が中心になっているようだが、正直——あんまり興味が  
ない話だった。僕のことかどう思われているかなんて、そんなもの余  
り気にしていなかったからだ。

気にしても仕方がないというか、意味がないというか、考えても無  
駄だと思っていた。

龍驤さんの言い分は、仲間の一人なんだから仲間として扱ってやれ  
というもの。

叢雲さんの言い分は分からないけど多分、提督にもつと気を遣って  
やれと言っているのだろう。

別にどっちでもいいような気がする。  
別にどうでもいいような気がする。

こう思うのはきつと僕という存在が本来鎮守府にあるものではな  
いからそう思うのだろう。どこの鎮守府にもきつと妖精と話ができ  
る者がいないからそう思うのだろう。いないというのは単なる予測、  
予想だけど、きつと間違っていないはずだ。

だから、僕はここ——鎮守府にいられるのだから。

そんな特殊性の塊の僕をどう思うかは千差万別のはずである。僕  
という存在がいることで善いことが起こることもあれば、悪いことも  
起こる可能性がある。そのメリットとデメリットは見る人によって  
配分が違っている。

妖精を相手にしている僕。

深海棲艦を相手にしている艦娘。

艦娘を相手にしている提督。

見えているものは、みんな違っている。

もちろん、好かれていたいとは思う。

誰も嫌いでいて欲しいなんて思ったりはしない。

でも、全部が全部自分を愛してくれるなんてそんな思い上がりをするつもりはなかった。

地球上の生物全てが自分を好んでくれているなんて考えるのは無理があった。

つまるところ、どっちでもいいんだ。

好きでいてくれる人と同じだけ、嫌いでいてくれる人がいる。

合う、合わないはあるけれど、それが個性っていうものだろう。

ただ、話をする機会が少なかったのは事実かな。僕の妖精管理部という仕事上、艦載機に乗っている妖精を相手にすることが多いから空母以外の——駆逐、軽巡、重巡、雷巡、戦艦の艦娘たちとはコミュニケーションをとる機会がなかったのだから。すり合わせをしてこなかったのは僕の職務怠慢だろう。こうして食事をしに外に出ることもしてこなかったのだから。噂の真偽を問い直すこともしてこなかったのだから。

今度からは、もうちよつと外に出よう。

外に出て、コミュニケーションを取ろう。

隣で起きている喧嘩を見ていて、僕はそう思った。

「キミも何か言ったらどうなん!？」

おつと、考え事をしていたら急に話を振られた。

「そうだね、誰かカレーと一緒に食べてくれる人はいないかな？ 見  
ての通りいっぱいいいっぱいでさ。食べないともったいないし、手伝っ  
てくれるとありがたいんだけど」

「そうそう、今カレーに負けて絶体絶命のピンチなんよ……つてちやうちやう！　そうやない！　何言うとるん!？」

鋭いノリツツコミと共に頭を小突かれる。

普段なら龍驤さんの身長が低いから頭を下げなきや届かないのでわざわざ頭を下げているんだけど、今日は座っているから普通に叩かれた。

龍驤さんに視線を向けると、プンスか怒っている表情が視界に映る。怒っている顔をしているけど、目が笑っている。優しい目をしている。いつもの龍驤さんの調子に戻ってきた気がした。

入り浸っているなんて言われるぐらいに毎日のように来てくれる龍驤さんの調子はいつもこんな感じだ。何かに突き動かされるようにいつも元気で、ころころと表情を変えて笑っているイメージ。元氣娘———そういう表現がよく似合っている。

「いや、これで正しいでしょ。今言うべき言葉はこれで間違っていないはずだよ。他に何を言うの？　僕には思い当たらないよ」

「このアホ!!　今の流れでそんなボケはいらんわ!!」

「むしろボケたのは龍驤さんの方じゃない？」

「この流れでウチがボケるか!　今、真面目な話をしてるんや!

なんでキミはいつもそうなん!？」

「龍驤さんもいつも通りだよ？　ものすごく楽しそう。口角が上がっ

ているよ!？」

「な、なんやって!?!　ちよつち待ってな……」

そういって、頬をペタペタと触る龍驤さん。

そして、しばらくすると信じられないといった顔を僕に向けた。

「ほ、ほんまや……アカン!　この流れはアカンやつや!!　このままはしゃいで終わって、そんで帰ってから後悔するパターンや!!　ふええ……こりやマズいでえ……」

龍驤さんがツイントールを振り回して頭を抱える。

こんなやりとりをいつもやってきた。いつもこんなやり取りだった。これまでも龍驤さんから妖精管理部が良く思われていないことを聞いていた時、大体こんな感じだった。僕自身があんまり気にしていないからかもしれないけど、流して流して受け止めて冗談交じりにいつも会話を終わらせていた。

いつものやり取りに空気が少しだけ柔らかくなる。

ふざけたような雰囲気の世界を軽くした。

ふざけた雰囲気完全に重い空気を取り払った。

「ほらほら、しっかりしないと」

「せやな！　こういうときにこそしっかりせんぞ！」

「そんなしっかり者の龍驤さんの頭を撫でてあげよう」

「わーい！　褒めて褒めてー！　って、あつかーん！！　そうやない！」

その時、僕と龍驤さんのやり取りを見ていた駆逐艦の2人の顔に笑みが浮かんだ。

「ふふふ。そのカレー、僕が食べてもいいかな？」

「わ、私も手伝います！」

「時雨、吹雪!？」

叢雲さんは二人の言葉に驚愕しているけど、僕からすれば願ってもない申し出だ。目の前の敵——カレーを何とかできれば当面余裕ができる。

今の流れを大事にしたい。僕は、勢いづけるように再びお願いを申し出た。

「二人ともぜひとも手伝ってよ。料金は僕が払うからさ」

「それじゃあ、叢雲ちゃんも！」



「ちよ、ちよつと！ 私は食べるなんて一言も！」

「いいじゃないか。間宮さんのカレーはおいしいよ」

「ああもう！ そんなに強く腕を掴むのは止めなさい！ 食べればいいんでしょ食べれば！ あんた、せいぜい二人に感謝しなさいよ」

もともと龍驤さんが座っていた場所に次々と流れ込むように駆逐艦の3人が座り始める。

叢雲さんの動きを完全に押さえつける様に吹雪さんと時雨さんが両側から腕を掴んでいる。叢雲さんは逃げる事ができないと悟ったのか、おとなしく座席に座った。座っている並び的には、左から僕、吹雪、叢雲、時雨の順番である。

残っているカレーの量はちょうど3人分程度だ。きつと食べることができようだろう。

3人はそれぞれにスプーンの間宮さんからもらうと次々と手を付け始めた。

「あ、あの！ 妖精管理部ってどんな仕事をしている部署なのですか？」

「二度艦娘が集められて提督から説明があつたけど、よく分からなかったんだよね。他じゃ聞かない部署だしね」

「そうなんです。いきなり新しい部署ができるって、それも妖精さんを相手にした部署って聞いて興味はあつたんですけど、なんだか複雑で……ごめんなさい、こんなこと言われても困りますよね……」

吹雪さんと、時雨さんがまくしたてる様に話しかけてきた。

提督さんが説明してくれたときには、僕はいなかったんだっけ。

なんでも混乱を避けるためとは言われていたけど、あの時直接出ればもう少し艦娘との関係も上手く回ったような気がする。あくまでも想像でしかないけど、もちろん悪くなっていた可能性もあるけど、今のようにはならなかったのは間違いないだろう。

「いいよ。聞きたいことがあったら何でも聞いて。答えられることなら答えるからさ」

「だったら僕から一つあるんだけど、いいかな？」

「どうぞ」

「なんで妖精の声が聞こえるのかな？」

「おっと、いきなり答えられない質問が来たね。さすがというべきかな。鋭い質問するよね」

なんで妖精の声が聞こえるのか。時雨さんからの質問は答えるのが酷く難しい。

この質問は例えて言うならば、なぜ貴方は目がいいのですかという問いに似ている。なぜ遠くまで見えるのかと問われても、見えるものは見えるとしか答えようがないのと同じようなものだ。

どこかでスイッチが切り替わるみたいいきっかけがあつて聞こえるようになったのなら原因も特定しやすいだろうけど、残念ながらそんなものがあつた記憶は全くなかった。

出会ったその時、何を言っているのか理解できたのだ。

気持ちが高飛んできているのが分かったのだ。

「そうだね、僕もよく分からないんだ。どうにもこっちの言語は理解しているみたいだから一方的には伝えられるんだけど、妖精の言葉って特殊っていうか——もはやテレパシーで話している気になっている」

「なによそれ、何も分からないのと大差ないじゃない」

「そうなんだよ。僕は何も分かっていないんだ。妖精のことも、話をしてそれほど長いわけじゃないからよく分かっていない。ただ、個性があつてみんな生きているんだなつて思うだけ」

最初文句たらたらだった叢雲さんも会話に参加しながらカレーを頬張っている。

こうして話していると、口に出していると余計に自分の無知さを思

い知る。自分がいかに妖精のことを何も知らないかということ。自分のことを何も知らないかということ。

今度前田君に聞いてみようかな。

妖精から見た——僕の見え方というのがどういものなのか、興味が出てきた。

「龍驤さん、こちらに座ったらどうですか？」

「そやね……」

力と元気を失った体がのっそりと赤城さんの隣に移る。

体面にいる赤城さんが綺麗な姿勢をして座っているから猫背になっっている龍驤さんが余計に疲れているように見えた。

「落ち込んでいるのですか？」

「そんなやない。ただ、やっぱり分かってもらえんのかって悲しくなっただけや……」

「分からないもの、見えないもの、話せないものを理解してもらうのは難しいことですから。耳に聞こえない人に音の素晴らしさを伝えるぐらい難しいことです」

「不憫や。ウチら空母は使役する側だからよく分かるが、それがどうやったって伝えられん。ほんま……みんな妖精の声が聞こえたらなあ……」

「そうですね。聞こえていたらこれほど拗れることもなかったでしょうけど、そうなったら彼がここに来ることはありませんでしたよ？」

「それはそれで嫌やんなー」

対面の空母組もそれはそれで楽しそうに話をしていたように思う。終始穏やかな雰囲気というわけにはいかなかったが、幕が下りるときには険悪な空気は何も残っていなかった。

そして、目の前にあるカレーの皿の上にも何も残っていなかった。

駆逐艦3隻がワイワイと一皿のカレーを胃に収めるまで時間はからなかった。ちよくちよく話をしながら食べたつもりだったが、数十分、いや数分の間皿は空となった。

僕は、目の前の壁がなくなったお礼を駆逐艦のみんなに告げた。

「ありがとうございます。これで気兼ねなく戻ることができます」  
「いえいえ、こちらこそご馳走様でした！ とっても楽しかったです！」

「ご馳走様。また今度、一緒に食事できるといいね」

「ふ、ふんっ！ 変なことしたら酸素魚雷を喰らわせてやるから覚悟していなさいよー！」

僕のお礼に3者三様の言葉が帰ってきた。

みんなバラバラで、みんな一緒に、ここに生きていることを実感させてくれる。

「またまた、叢雲ちゃんはそのんこと言ってー」

「そうそう、食べている間楽しそうにしていたじゃないか」

「してない！ それはあくまでカレーがおいしかったからで」

「はいっ、分かっています！」

「吹雪、あんた絶対に分かってないでしょ!?!」

「行こうか。次の演習が始まるよ」

「だから腕を掴むなって言ってるじゃない！ 一人で歩けるわ！」

時雨が席を立って吹雪が立ち上がって叢雲の腕を掴み連行しようとしたが、今度は振り払うように両者の手を吹き飛ばした。

そして、そのまま去っていくと思っていた叢雲さんが目の前まで近づいてくる。なんだろうか。何か用事でもあるのだろうか。表情を見ても何も読み取れない。常に怒っているように見えるその顔は、来た時と何も変わっていなかった。

「なにかな？」

「あんだ、今日夕方から夜にかけての時間にそっちに行くから妖精管理部で待っていなさいよ」

「それは構わないけど……」

「なんや、逢引か？ 手の早いやつやな。さっきまでの言動が信じられんわ……」

「叢雲ちゃん、やっぱり仲良くやりたいんですね！」

「ふふふ、やっぱり気に入っているんじゃないか」

「ちがーう!! 二人とも誤解よ！」

「はいはい、行きましょーね」

「これ以上遅れたら遅刻確定だよ」

今度こそ引きずられながら叢雲さんが連れていかれる。バタつきながらも吹雪と時雨が笑って引きずっている光景は、とても深海棲艦から海を守るために戦っている艦娘には見えなかった。

みんな生きている。

妖精だって。

艦娘だって。

人間だって。

生きて、生きて、いきている。

そんな世界が何だか好きになった気がした。

「はははっ、面白いなあ。みんな楽しそうで何よりだ」

「お、今の笑顔は百点やな。キミもそんな風に笑えるんやね」

「はい、今までで一番自然な笑顔だったと思います」

「そうかな？」

「ええ、間違いなく」

なんでだろうか。

二人からそういわれて、さらに笑みが深まった気がした。

#### 第4話 同色の者を、異色と言った。

泣いてしまえ。

苦しさを飲み込んで自分を傷つけて死んでしまうぐらいなら——  
泣いて吐き出してしまえ。

今日も妖精たちが飛んでいる音が聞こえる。  
艦載機のエンジン音が頭の中で響いている。

「みんな、無事に帰ってきてね」

午後——出撃が多くなる時間帯。

ガラガラになっている宿舎に取り残された自分だけがぽつりとここにいた。

「無事に、帰ってきてね」

そつと両手を合わせて祈りを捧げる。

捧げる対象は妖精たち。

生きて帰ってほしいという想いだけを精一杯に込める。

別に祈らなくても変わらないことは知っているけど。

やらなくても変わらないことは分かっているけど。

それでも何もしないとすることはできないから。

今の僕にはそれしかできないから。

「今日の戦死者は18名です」

無機質に聞こえた言葉に僕たちは誰も何も言えなくなった。

重苦しい雰囲気誰しもが飲まれていた。

18名——今までで一番大きな被害である。

大きくなってきた僕たちの鎮守府もついに空母を相手にするようになったのだろうか。

もちろんこれまでだって無傷でこられたわけじゃない。だけど、多くても3名までだったこれまでの被害とはわけが違う。82名のうち18名だ。ぽつかりと空間が空いて広くなる。

18名の中には、足立君の名前もあった。仲間が堕ちるのが怖いと恐怖を口にした怖がりな誰よりも仲間を大事にする者の名前があった。

いつも隣にいた人がいない。いつも話していた相手がいらない。

恐怖と虚しさが、残された者の心を大きく占めていた。

「東部オリョール海において敵主力打撃群と交戦、空母ヲ級2隻を同時に相手取りこれを見事撃沈いたしました！ 対してこちらの被害は軽微！ 出撃した吹雪、祥鳳がともに中破。赤城、足柄、利根は小破。神通は無傷とのことでした」

前田君が報告してくれた戦果は甚大である。きつと提督、艦娘たちは喜びの中を歩いているころだろう。上手くいったことに喜びを噛みしめていることだろう。

だけど、ここには喜んでいる妖精は誰一人いなかった。失ってしまったものの大きさに頭を整理するのはいっぱいのようで誰もが口を紡いでいる。唯一戦果を口にしていた前田君も必死に堪えているようだった。

各々が悔しそうな、泣き顔を晒しながら力なくとぼとぼと寮へと歩いていく。

「みんな、おかえりなさい！」

できるだけ大きな声でみんなに声をかける。

誰が死んだのかなんて聞くことはしない。

それはみんな知っていること。

僕も知っていることだ。

悲しそうなみんなの顔を見ると、思わず泣きそうになる。

こんな想いをしてる今を投げ出したくなる。

それでも、そうするしかないから。飲み込むしかないから。僕たちはそのためにいるんだ。死なずに生きていられることの方が稀なんだ。生き物はいつか死んでしまうんだ。そんな理屈で吐き出しそうになる感情を無理やりせき止めていた。

「……………」

その日の夕方には妖精みんなで黙祷がなされた。静かに手を合わせて、各々が想うことを海の彼方へと届けた。

埋葬するものなんて何も無いけど、名前が刻まれた小さなお墓を作った。無限に広がっているように見える海に消されてしまつて何もかも忘れてしまうのが嫌だったから。そんな想いから始めた僕の行動を妖精たちもいつしか手伝うようになっていた。

名前の刻まれたお墓の前で両手を合わせていると、不意にお墓に影が被った。等身大の大きさから妖精ではないことは一瞬で分かった。ここに来たのは、あなたで3人目です。

僕はゆつくりと振り返り、史上3人目となる訪問者を視界に収めた。

「あなた……………」

「叢雲さん、いいところに来たね。よかつたら手を合わせてあげて。今日の勝利のために沈んだ英雄たちのために」

叢雲さんは、複雑な表情を浮かべながらも手を合わせて黙祷してくれた。夕日に照らされた銀髪が彩を加えている。丁寧に重ねた両手には優しい祈りが込められているように見えた。

暫くした後顔を上げた彼女の瞳は、綺麗なほど澄んでいた。



「ねえ、あんた……いつもこんなことしているの？ 馬鹿じゃないの？」

「そうだよ。誰かが帰ってこなかった時はいつもやっているよ。それこそ馬鹿の一つ覚えみたいにやっていることだ」

「妖精って死んでもまた生まれてくるんでしょ？ いちいち死んでいるのを気にしていたら辛いだけよ？」

死んでも生まれてくる。

どうしてそんなことが簡単に言えるのか。

少なくとも、妖精たちの前では言ってほしくなかった。

「お前も同じ癖に。代わりのいる偶々の代わりモノの癖に」

叢雲さんを後ろから恨めしそうに見る妖精が、一睨みして去っていく。

悪気はなかったのだろう。本心からの素直な気持ちだったのだろう。そう思えるだけに、妖精たちの表情は悔しそうで悲しそうで、目元には涙が光っていた。

妖精の言葉が聞こえない叢雲さんは気づいていないようだったが、僕には叢雲さんのことを咎めることはできなかった。

見えないもの、聞こえないものに対する感情など、その程度のもなのだ。見えないところで誰かが死んだことを、身近なものに感じろというのは酷である。

「心配してくれるんだ」

「そ、そんなんじゃないわよ！ ただ私はこの鎮守府の空気を崩したくないだけ！」

「そこは心配いらないよ。僕は、せっかくみんな喜んでいるのにそれを台無しにするようなことはしないから」

それこそ要らない心配だ。

僕たちは誰にも悲しみを告げることはないだろう。

僕たちは誰にも訴えかけることはないだろう。

死んだことに対して何かができるわけではないのだから。言えば救われることもないのだから。これから戦況はどんどん苦しくなる。深海棲艦はさらに強さを増していく。そうなれば、死者の数はもっと増えていくだろう。

僕たちはずっと黙って耐えるだけだ。弱音を吐かずに、散っていく。増えて減つてを繰り返して、続いていく。

妖精は、決して艦娘に想いを届けることはないだろう。

それに、妖精のいる場所に訪れる者は、艦載機を取り扱う者だけだと相場が決まっている。そもそも出会う機会もないのに、雰囲気壊すなんて至極無理だ。

特にお墓にまで来てくれた者となると2名だけ——提督と「叢雲」だけだった。

「で、何の用かな？　こんなところまで僕と何を話しに来たのかな？」

「今日聞きたいことは別にあつただけど、先に聞きたいことができたらからそつちから先に聞いわ」

「どうぞ」

「妖精なんて死ねばすぐに生まれてくるのにこんなお墓まで立てて、何のつもりなの？」

「難しい質問だね」

——何のつもりなの。

その疑問を聞いて、頭の中が回答を探し始める。

「あえて言うなら生きていた証を残してあげたいからじゃないかな？」

「生きていた証？」

「そう、生きていた証」

僕は、妖精の存在に疑問を持っていた。

まるで死ぬために生まれたような、戦うために生まれたような彼の存在が不思議だった。声は誰にも届かず、思いは誰にも伝えられず、深海棲艦と戦うことだけ義務付けられている。艦娘が装備する艦装に付属する備品みたいなもの。

きっとそんなふう生まれしてきたのは、どれがあっても深海棲艦と戦う際に邪魔になるからなのだろう。

声を出せたら、想いを伝えられたら——きっと使う事を躊躇うから。

みんな違う存在で、唯一のかけがえないものだと思ったら——失うことを恐れて戦えなくなるから。

だから分かっていている者が、気付いている者が、せめてもの記録を残さなければならぬと思ったのだ。

「同じ者なんて誰もいないんだよ。みんな違う者なんだ。艦娘のみんなは同じように取り扱うけど、全員違う者なんだよ。今日死んだ妖精と、今生き残っている妖精は違う」

妖精の存在は、まるで道具だ。まるで無機物だ。

彼らには名前だつてあるのに。

感情だつてあるのに。

誰も呼んであげられない。

誰も察してあげられない。

同じ者など何一ついないのだ。

同じように見えても同じではないのだ。

それは艦娘に関しても同じ——妖精も同じだ。

「死んだときに何も残してあげなかったら、何もなくなっちゃうだろう？ 何もなくなっちゃったら、まるで生きていたこと自体がなくなってしまうみたいじゃないか」

「私にはどれも同じに見えるけど……あんたは不器用なのね。そんな

ことをしていたらいつか心が壊れるわよ？ 気にしすぎもよくないわ」

「僕なら大丈夫。慣れているから。ずっと前から、生まれた時から、ずっとこうして生きてきたから」

「あんた……」

不器用だから生きてこられたんだ。

賢かったらきつと生きていられなかった。

覚えて、記憶して、刻み込んできたから今がある。

もう誰も覚えていないけど、もう誰もいなくなっただけど、僕だけが抱えている記憶がこれまでの過去を雄大に示している。

分かってもらおうなんて思わない。

僕は、頭の中で会話を打ち切ると主題から離れ続けている会話を修正しに走った。

「この話はこれでおしまい。それで、叢雲さんの用事って何なの？」

「……あんたには、そのつもりはないかもしれないけど一応釘を刺しておこうと思って」

そう言った叢雲さんの表情が僅かに曇る。

決意を込めた表情で、少し多めに息を吸い込むとまくしたてるようにセリフを吐いた。

「よく聞きなさい！ 絶対に司令官の期待を裏切るようなことはしないで！ 司令官はあんたのことを随分と信頼しているわ。でも、私にはあんたが不穏分子にしか見えない！」

叢雲さんの推測は間違っていない。

僕は、不穏分子だろう。というか、異物だろう。

妖精が見えるというだけで。

妖精と話せるというだけで。

十分に異分子である。

「大丈夫だよ、僕からは何もするつもりはないから」

「そうじゃないのよ!! あんたに何かをするつもりがなくても、周りがそういう雰囲気を作り始めてる! 空母の連中はあんたにずいぶん肩入れしているみたいだし、内部分裂なんてしたら目も当てられないわ!」

「ああ、そういうことか」

「本当ならすぐにでもここを追い出してやりたいところよ! だけど、司令官が言うから仕方なく置いてあげてるの! 少しは立場をわきまえなさいよ!! 私からはそれだけ!!」

まるでお前のせいだと言わんばかりの勢いで顔を赤く染めながら指をさす。これは、彼女なりの宣戦布告のようだった。

提督に害をなせば即座に追い出す。叢雲さんも提督さんのことを心配しているのだ。僕が仮に造反した場合に、それに付随してしまう艦娘が出ないように警戒しているのである。内部で裏切りが行われて、かつて仲間だった者たちで争うなど、提督が最も見たくない光景なのだろうから。

叢雲さんは、言うだけ言ってその場を後にする。

どんどんと小さくなる後姿が見えなくなるまで見送る。

妖精もいなくなり、叢雲さんもいなくなった妖精の墓には、僕だけが残った。

「どうすればいいのかな。僕はどうしたら、どうすればいいのだろう?」

疑問が頭の中を徘徊する。

見上げた空は、綺麗な茜色に染まっている。

オレンジ色の雲は、青空の下とはまた違った顔を見せていた。

空を漂う雲のように、風のままに気ままに生きていけたらいいのに

——そんなことを考えていると唐突に先ほどと同じ大きさの影が差した。

「あんた、一方的に言われすぎ！　なんとか言い返しなさいよ！　裏切られる方が悪いって言いければよかったじゃない！　裏切られるなんて人望がないんじゃないって言ってやんなさいよ！」

「駄目だよ、そんなこと言ったらそれこそ追い出されるでしょ？」

「そうなたらそうなたでしよ!?　世間知らずに言いたい放題言われるのは癪に障るのよ。何も知らないくせに、先に来た奴っていうのはそれだけで何を言っても許されるって？　冗談じゃないわ！」

怒りを見せるテンポはさつきと同じ。

声のトーンもさつきと同じ。

それもそのはずだ——ここにいるのは、叢雲だからだ。

「叢雲さん」とは違う、「叢雲」がここにはいた。

「叢雲、色々と言いたい気持ちは分かるけど、落ち着いて」

「これが落ち着いていられる!?　あんたが間違って私をあいつと混同しなかったら私は解体されていたのよ？　いらぬからって、二人目だからって!!」

どうして叢雲がここにいるのか。

それは、解体される手はずだった叢雲を「叢雲さん」と間違えたからだった。

妖精と話すことができる関係上、工場に出向くことも多かった僕は解体の場面に立ち会うこともあった。解体現場には、どこかで見たような艦娘がいつも毎日2体ずつ送り込まれてくる。

僕がこの鎮守府で知っている艦娘はそこまで多くない。それこそ両手で数える程度のもの。だけど、ある日送られてきた艦娘を知らないわけがなかった。なぜならば、その者は提督の初期艦であり、秘書官だったからだ。

僕は、何度も目にした存在である叢雲が解体されるのはおかしいと——彼女を叢雲さんと勘違いして止めさせたのである。

「同じ名前を持つ艦娘が同じ場所にいると悪影響が出るんだろうね。叢雲は叢雲さんを見ていてやっぱり不安になったり、負の感情が出てきたりするの？」

「ええ、怒りと苛立ちで頭の中がぐちゃぐちゃよ。あんたを馬鹿にしたことは絶対に許さないんだから！」

「あれ、僕のことと怒っているの？ てつきり居場所をなくした方を怒っているかと思ったのに」

「あっ……ち、違うわ。あんたのことで私が怒るわけないじゃない。あんた、何を勘違いしているの？ 少し自意識過剰なんじゃない？」  
「そんなこと言わなくても、叢雲はなんだかんだ優しいから僕のために怒ってくれているのは分かっているよ」

「私のことを優しいとか言わない！ 私は、あんたに借りがあるのよ。助けてくれた借りが……今は私のせいであんたの立場が悪くなっているから文句が言える身分じゃないのは分かっているのよ……」

叢雲は、怒ったり、困ったり、喜んだり、恥ずかしがったりと随分と感情が豊かだ。普段は怒っているところしか見ないから知らなかったが、見ている面白い人なんだと近くにいて初めて知った。

知って、気付いて、やっぱり叢雲と叢雲さんは違うって思うようになった。違いが分かるようになって、艦娘と妖精の近似性がより感じるようになった。

どうして艦娘は、妖精のことを道具のように見てしまうのだろうか。僕には両者の違いが分からなかった。聞こえているか、見えているか、伝えられているか、きつと違いなんてそれだけなのだろう。それが——全てなのだ。

「やっぱり私を解体した方がいいんじゃないかしら……」

「それは無理、もう遅いよ。今頃解体して証拠隠滅してそれで終わ

りって？ 僕はそんな結末を納得しないから。だってそれだと、叢雲の存在が最初からなかったみたいじゃないか」  
「だけど、このまま私を匿っていたら追い出されるわよ？ 解体してないことがばれたら、いくらあんたといえど」  
「いいんだ。それがこのやり方だっていうのなら追い出されても仕方がないよ」

それで追い出されるようなら、それも仕方がないだろう。  
軋轢を生まないように同艦は解体する。きつとここではそうしている。それに逆らうようなことをしている僕を追い出す結果になったとしても、それで弱みを握られて脅されても、僕はそれで構わないと思っていた。

「追い出されたらどうしようかな、何か仕事を探さないかね」  
「し、仕方ないから私も付いて行ってあげるわ。あんた一人じゃうまく生活できるとは思えないし……料理ぐらいなら、作ってあげる」  
「うん、そうなったらよろしくね」

未来がどうなるかなんて分からない。

叢雲がこうして生きているように。

僕がこうして生きているように。

妖精が18名死んだように。

今日も2隻の艦娘が解体されたように。

知らないところで終わって、始まっている。

そして、今日はまだ終わりを見せるつもりはないようだった。

「あれ、叢雲ちゃん？ こんなところでどうしたの？」

「ふ、吹雪、これはね、ちよつと事情があつて」

「叢雲さんから、艦隊のことを聞いていたのですよ。私はまだ新参者で、初期艦の叢雲さんに色々と教えていただきたくことがあつたので」



「そうだったのですか。叢雲ちゃん、随分仲が悪そうだったから仲良くなつたのなら良かったです！」

「吹雪さんは、どうしてここに？」

「ああ、忘れるところでした！ 妖精管理部、部長——司令官から至急、執務室に来るようにとのことです。ご同行願えますか？」

もしかしてばれたのだろうか。

矢継ぎ早に進む話で叢雲の表情に動揺が走っていた。

しかし、ここで行くのを拒否する理由もない。断つた方が不自然である。

「それでは叢雲さん、お話ありがとうございました。先に行きますね」  
「え、ええ」

僕は、叢雲を残して吹雪の歩みに足並みをそろえた。